

くまもと二十世紀

A子は、初めてK太郎の両親に会った。安堵感が広がるのがわかった。K太郎のプロポーズを受けたものの、A子にとって都会を離れるのは初めてだし、熊本という地を訪れるのも初めて。これからK太郎と一緒に、この熊本で一生を送るのだと考えると不安が高まってきても不思議ではない。しかし、空港に出迎えたK太郎と、その両親に会った途端、ほっとしたのだ。父親が第一声に「よか娘さんたいノ」と誉めちぎったからだ。

空港からK太郎の家へ向かう車窓の風景は、A子にとって珍らしいものだった。緑、緑、緑……。二十一世紀も半ばを過ぎて、このように緑の多い風景を目にすることは、奇跡に近いものだった。

「名前がわからないけれど、いろんな樹々や花々が残っているんですね。」A子は、感激して呟く。「ああ、あの中で皆が生活しているんだ。熊本の自然の生態系を完全に残したまま、技術と、それを利用する人間が、システムの中で共生しているんだ。」K太郎が、そう答える。でも、詳しいことは、よくA子にはわ

からない。ただ、植物たちに出会えたという感激だけがA子にはある。「あ、あれが、阿蘇の外輪山でしょう。巨大な緑のチューブが外輪山を一周しているんですね。」それは不思議な光景だった。

「加速器だよ。新エネルギー源となる素粒子を、あそこで取りだしている。末発見の素粒子を、アソ加速器で二十以上も発見できたんだ。ぼくたちの住まいも、あの麓にあるんだ。」

K太郎はフリーランスのシステムエンジニアだ。情報網の発達で、K太郎のような仕事は、どんな場所でも受注が受けられる。その近くでK太郎の両親は農業を営んでいる。パイオ技術の発達で、少い耕地で、さまざまな珍しい農作物を、大量に創造している。A子は聞かされていた。

「さあ、着いた。」古い木造の作りの家だった。庭に鶏が走りまわっている。A子は目を丸くした。

「やあ、今、お帰りですか？その方がK太郎さんの婚約者？」隣の家で、声がする。A子を見ると、数人の男女が楽器を携えて、立っていた。「皆で待っていたんですよ。歓迎の曲を奏でようよ。」

K太郎が、頭を掻いて説明した。「この村の仲間だよ。A子のことを歓迎するってね。」
K太郎の仲間たちは、ブルーグラスの曲をみごとに弾いて、そこから引きあげた。「よろしくノ」の声を残して。

「皆、何をやっている人なんですか？」

